



〈名もなき天才写真家の素顔〉

ジャーナリスト
松本 侑壬子

これはドキュメンタリー映画だが、まるでよくできたサスペンス映画のように、ある女性の驚くべき人生の秘密を追い、わくわくと感動のラストへと導く。

ヴィヴィアン・マイヤーとは誰か？

一番知りたかった人は、この映画の監督自身で米シカゴ在住のアマチュア歴史家ジョン・マルーフ青年だった。

二〇〇七年、ジョンは古いシカゴの写真を探してオークションで大量の写真ネガを入手した。自分の目的には使えなかったが何か心ひかれ、その写真の一部をネットで公開してみると、予想もしなかった大反響があった。撮影者ヴィヴィアン・マイヤーの名前は、最初はネット検索に引っかけられなかったが、二年後の二〇〇九年に再度トライすると、一件ヒット。「数日前に八三歳で亡くなった」という死亡記事だった。

これを手がかりにジョンが探し当てた生前のヴィヴィアンを知る人物は、意

外にも「ヴィヴィアンは自分のナニー（乳母）だった」という。ナニーだった人がなぜこれほど優れた写真を大量に撮ったのか、いったいヴィヴィアンとはどんな女性だったのか。

ヴィヴィアンは、ストリート・フォトと呼ばれる都市の庶民を撮った作品を十五万枚も残している。中には鏡を利用したセルフ・ポートレートもある。帽子をかぶり古めかしいスーツ姿で、乳母というよりも厳しい「先生」といった感じだ。表情は一樣に硬くまなざしも鋭いが、冷たいというよりも譲れぬ信条をもつ真面目な人柄といったところか。生涯独身で、後半生は職場（雇い主）を転々と変え、最後はかつて乳母として世話をした家庭の子どもたちに生活援助を受けていた。彼女は溜め込んでいた膨大な量の写真ネガや未現像フィルム、八ミリの十六ミリの映像素材、カセットテープ、新聞の山などのほかに、メモ、チラシ、定

期券、カード類などありとあらゆる記録類を捨てずに、住み込み先が変わるたびに段ボールに詰めて持ち運んだ。最後は家もなく貸倉庫に預けていたが、レンタル料が払えなくなり、二〇〇七年に競売にかけられたところをジョン・マルーフが買い取ったというわけである。

ジョンは段ボールの中のメモ類のおかげでヴィヴィアンのこれまでの足取りや連絡先などをたどることができた。生前の彼女を知る人はみな「変わり者」と呼ぶ。常にカメラを首からぶら下げ、アーミーブーツで興味の向くままに、時には子どもらそっちのけで撮影に没頭したが、頑なまでに秘密主義で何を撮ったかは誰にも知らせなかった。第一、撮ったフィルムは未現像やネガのまましまいこみ、生涯発表もせず活用もしないままに競売で他人の手に渡ったのだ。おかげで、写真の専門家ではなかったジョン青年の人生を変えさせることになったのである。

さまざまに語られるヴィヴィアン像が時に真逆であるのも興味深い。それにしても、ヴィヴィアンは写真を撮ることだけが生き甲斐で、結果には関心が高かったのだろうか。今や世界的評価の高い写真家、とは皮肉である。



『ヴィヴィアン・マイヤーを探して』

アメリカ映画 (83分)

監督：ジョン・マルーフ、チャーリー・シスケル

出演：ヴィヴィアン・マイヤー、ジョン・マルーフ、ティム・ロスほか

10月10日(土)よりシアター・イメージフォーラムほか
全国順次公開

© Vivian Maier_Maloof Collection